僕の中指

はるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の中指

【Ｎコード】
Ｎ４０６０Ｇ

【作者名】
はるみ

【あらすじ】
僕の中指は、彼女のアソコを一番良くしっている。そんな僕の物語は止まることなく爆走をつづけています。誰も読んでくれなくたって、僕の爆走は止まりません。

春のうららかな日差しの中で、僕は会社をサボって公園でお弁当を食べていた。

コンビニでビニールのシートとお弁当を買った僕は、桜がピンクの蕾をつけている木の下に半畳ほどの場所を占領した。

１０００円もする特製幕の内は僕にとっては、十分に奮発したお弁当だ。

特製幕の内弁当の蓋を開ける僕の左に中指に、ちょっと離れたところに赤い花をつけている寒桜の花びらが舞い落ちた。

僕　：「この中指は誰よりもきっとキミのアソコを知っているよ」

彼女：「まじまじと自分の指を見て何言ってんの？」

僕　：「だって、僕の目がキミのアソコを見ても奥の方までは見えないじゃない。
だけど、中指は奥の方まで行ってるから、僕の目が知らないところまで知ってると思うんだ」

彼女：「オチンチンはもっと奥まで行ってるよ」

僕　：「オチンチンには必死だから、きっと分かんないよ」

彼女：「なんでオチンチンは必死なのよ」

僕　：「必死に動かないといけないじゃない」

僕の左の中指は、彼女のアソコの入口周辺をゆっくりと撫でてから奥へと進む。

そして第二間接から曲がり彼女の敏感な部分を探りあてるように動く。

柔らかい彼女のアソコの中で僕の中指が動くと彼女は目をつぶり僕の中指に身を任せる。

僕は小刻みに振るえる彼女の乳首に歯を立てながらもう片方の乳首を摘むのが好きだった。

カラダ全部を僕の前に投げ出してくれる彼女が愛しかった。

僕が乳首から口を離し彼女の耳元で「大好きだよ」と呟くと彼女は吐息を漏らす。

僕はその吐息の中に「私も大好き」という言葉を聞いて安心する。

彼女：「もうダメ」

僕　：「入るよ」

彼女：「うん。早く」

僕は彼女の中から中指を抜くと、代わりにオチンチンを入れて夢中で腰を振り彼女のお腹の上で果てる。

彼女：「キミのデカ過ぎるよ」

僕　：「キミの中に入るといつもより大きくなる気がする」

彼女：「やっぱり、中指よりもオチンチンの方がいっぱい知ってるよ」

僕　：「さっきの動きを感じた？　すっごい高速で動いてたでしょう。あれじゃ、中の様子は良くわからないよ」

彼女：「腰が抜けるよ」

僕　：「大丈夫だよ。もっと早く動けるようにしなくちゃ」

僕はまた彼女のアソコを中指で確かめた。

柔らかくてヌメヌメした彼女の敏感になったアソコは、僕にとっては愛を確かめる場所なんだ。

「暖かい日は、二人で公園でお弁当を食べようね」

そう言ってた彼女が座る場所には、寒桜の花びらが彼女の代わりに座っている。

僕は彼女のアソコを一番良く知っている中指を花びらの上に乗せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4060g/

僕の中指

2011年1月16日14時41分発行